

推 薦 書

この度、貴学会が公募されている 2023 年度（第 12 回）日本呼吸ケア・リハビリテーション学会賞の選考にあたり、医療法人社団恵友会 霧ヶ丘つだ病院が同賞にふさわしい活動と業績であることから、ここに推薦いたします。

霧ヶ丘つだ病院は、1966 年 11 月に津田稔先生によって開設されました高坊津田内科をルーツとし、以来 50 有余年にわたって北九州地域の呼吸器診療を一手に担ってきた専門施設です。津田稔先生は同院開設前年の 1965 年に「慢性肺気腫のリハビリテーションの実際」を日本胸部臨床誌に寄稿されました。この論文は本邦における呼吸リハビリテーションに関する最初の報告であり、その実施内容は近年のプログラムと大きな相違がないことは驚愕に値するものです。その「先見の明」、そして「真の患者さん中心の医療」は、二代目病院長の津田徹先生に引き継がれ、以来、当該施設は呼吸リハビリテーションのみならず、在宅酸素および人工呼吸療法の導入、訪問医療の展開、さらには睡眠センターの開設など、幅広い呼吸器ならびに睡眠医療とケアを実践しておられます。地域住民にとって「かかりつけ内科病院」と「呼吸器医療の要」としての役割を十二分に果たされてきたことに、推薦者のみならず多くの本学会関係者は心から敬意を表さずにはられません。

また、当該施設では音楽療法やアロマセラピー、さらには臨床美術など、呼吸器疾患の患者さんにとって有益と思われるものは積極的に診療やケアに取り入れておられます。まさに患者志向にある「先見の明」は慧眼となって、新たな呼吸器医療へのチャレンジにつながっているものと言えます。加えて、患者さんが抱える全ての問題を解決するために、多職種メンバーによる一致団結したチーム医療がごく当たり前のよう展開されています。津田院長を通じて、推薦者も多くの当該施設スタッフと関わる機会を持ちましたが、メディカルスタッフが生き生きと活躍している職場であることをよく理解しています。これらは、津田院長の強力なリーダーシップに加えて、スタッフに対する厚い信頼、そして全職員の高い使命感によって実現されているものであり、患者さんの大きな安心や信頼につながっているものと確信する次第です。

呼吸器疾患の患者さんはリハビリテーションへのアクセスが制限されています。また、介護保険領域での不利益も問題となっており、患者さんが取り残されている状況に置かれています。津田院長を中心に、呼吸器疾患患者さんの社会的救済を図るべく医療のみならず介護や社会福祉、さらには行政にも働きかけ、その連携のために奔走されておられることは特筆に値するものです。霧ヶ丘つだ病院は施設内のみならず、地域においても呼吸器疾患の患者さんのための地域包括ケア体制、医療体制の整備にも尽力されていることを申し添えます。

このような活動は現場での実践にとどまらず、成果あるいは提言として学術的にもしっかりとまとめられています。これらは、日本呼吸ケア・リハビリテーション学会を中心に多くの関連学会や研究会を通じて積極的に発表されるとともに、実践報告、研究成果、エビデンスとして多くの論文として報告されており、その業績も申し分ないものと考えます。こうした学術的な活動を継続されていることも、併せて高く評価されるものであります。

「患者さんの幸せのため」にと全スタッフ一丸となった毎日の取り組み、信念と気概を持って活動を続けてきこられた当該施設に対し、推薦者は心から敬意を表している次第です。このように霧ヶ丘つだ病院の活動は貴重であり、合わせて、理事ならびに九州・沖縄支部長を長きにわたって務められた津田院長による当学会への貢献、さらには現在の日本の呼吸ケア・リハビリテーションの普及を黎明期から支えてきた貢献は多大であり、学会賞として最適であると確信し、ここに推薦する次第です。

令和5年5月22日

長崎大学生命医科学域

教授

日本呼吸ケア・リハビリテーション学会 九州・沖縄支部長 神津玲